

## 初期ミルトンにおける死の意味

—*On the Death of a Fair Infant Dying of a Cough*  
の解釈を中心として—

原 田 純

ジャコビヤン期の終った所から出発したミルトンが自分に譲した主題は死であった。このことによって彼は死に深刻な意味を与えていたジャコビヤン期の思潮に深くかかわりつつ、その中から新しい恩寵の意義を把んでいったと考えられる。彼の最初の英詩である「咳ゆえみまかりし美しき赤児の死に寄せて」は死が天の攝理によって地上祝福を行なうというミルトン的な死の意味をはっきり示している。

### I

1628年1月28日にミルトンの姉 Anne Phillips の子が聖マーチン墓地に葬られた。3歳と推定されている<sup>(1)</sup>。彼は哀悼歌を作って姉に贈った。この詩においては赤児の死がつぎのような形象となって登場する。即ち死の原因となった咳は winter, 赤児は primrose のイメージを与えられ、好色と懶慢の動機によって winter が primrose を襲うのである。このストーリーが生み出す性と暴力の犠牲という強烈なイメージは悲しみの母に贈る詩としては余りに苛酷なものであり、かかる衝撃的な冒頭で始めたことは、この詩が母の悲しみを極限にまで拡げたことを意味し、このことによって悲しみの克服とそれに続くべき死の積極的な意義の回復をも同じ振幅において喜びの方向に拡げうる可能性を示しているのであって、ミルトンにおける詩作の戦略とも呼ぶべきものである。それ故 winter と primrose で始まる lamentation からどのような consolation

が展開されるかを辿るならば、我々はこの詩における死の意味を発見してゆくことができるであろう（拙稿の終りに付した表を参照）。

まず winter · primrose 場面は現実に起った赤児の死の擬人的処理であり、地上における死の形象的理理解である。Winter が primrose を見付けて襲う舞台は地上と “middle empire of the freezing air” (l. 16) とに明示される。この地上の死に対して、Apollo と Hyacinth の神話が4連で展開される。愛する者の死になす術を知らない winter に対して、Apollo は自分の力で Hyacinth を花に変えることができる。地上レベルの死が残酷な不毛性と一回性として現われるのに対して、古典神話の舞台では死が季節回帰的な生として回復され、一種の不死性を与えられる。これを地上的死に対してオリンパス的不滅と呼んでおこう。地上的死とは無力な者 “Soft silken Primrose” に対する暴力 “Bleak winter’s force” の勝利であり、それはまた皮肉にも不能者 “childless eld” が自分の不毛を再確認する行為でもある。

For he being amorous on that lovely dye  
That did thy cheek envermeil, thought to kiss  
But kill’d alas, and then bewail’d his fatal bliss. (ll. 4-6)

地上的死とは死者はもちろん行為者自体にも不毛として返ってくる絶望である。これに対してオリンパス山のレベルでは死は神話的変形という救済を受けることができる。第1連から第3連に亘って展開された地上的死に対して、第4連でオリンパス的不滅が導入されるのは、この二つの死の比較から惹起される地上的死の絶望についての新たな認識である。ここにおいて、今までのストーリー中心の調べはコロンで切られ<sup>(2)</sup>、主情的な lamentation がこれに代るのであって、これが表における第2の “Renewed Lamentation” である。この “Alack, that so to change thee winter had no power” (l. 28) のリリシズムを支えるものは、オリンパス的不滅との対照によって一段と高められた地上的死についての切実な不毛、絶望感である。この感情は死体が墓の中で腐るという形象によって、第5連へと発展する。しかし第5連の意義は地上的死の

陰惨を再現するのにあるのではなく、これらのイメージを第二次的なものとして、レトリック上からは超えてゆく device, 即ち “Yet can I not persuade me...” を主節として、腐爛死体のイメージを従節に入れる文の構造によって、lamentation を consolation に転換させてゆくことにある。第3連20行から導かれる “thy corse corrupts in earth's dark womb” (l. 30) 及び “thy beauties lie in wormy bed, / Hid from the world in a low delved tomb” (ll. 31-32) という地上的絶望の表現が “Yet can I not persuade me ...” の文に内包されることによって、更に “Could Heav'n for pity thee so strictly doom?” (l. 33) という反語疑問文を経ることによって、今までとは異質なイメージが現われてくる。

Oh no ! for something in thy face did shine  
Above mortality that show'd thou wast divine. (ll. 34-35)

第1連から第3連までの lamentation では赤児の顔の美しさ “that lovely dye” が死の直接原因となったのに対して、ここでは赤児の顔に見える “something... divine” なるものが不死の証として歌われている。Winter の欲情を駆りたてた “dye” が今 “thou wast divine” を示す聖なる証拠へと転ずるペラドックスは lamentation から consolation の場面転換に伴って、同一物が逆の意義を持って現われることの発見である。

第5, 6連でかかる転換が行なわれ、7連に入ってストーリとして展開されることによって、consolation がはっきり響いてくる。しかしこれを可能にする第6連の機能を考えてみる必要がある。この連の重要さは今まで地上からオリンパス山上までに限られていた場面を一挙にキリスト教的な宇宙空間に拡大することである。詩人が赤児の靈に問う三つの質問<sup>(3)</sup>、(1)何処を舞っているか、(2)生前人間であったのか、(3)何故かくも早く飛去ってしまったのか、これらを貫いているのは不死なる靈の飛行であり、かかる飛行をストーリの中で可能にするために空間の設定が明示される。

Tell me bright Spirit where'er thou hoverest  
 Whether above that high first-moving Sphere  
 Or in the Elysian fields (if such there were). (ll. 38-40)

シェイクスピアは時間の詩人であり、ミルトンは空間の詩人であるともいわれるが<sup>(4)</sup>、ミルトンにおける空間概念が最初に明確な形をとるのはこの詩と同年に書かれたラテン詩 *Naturam Non Pati Senium* の中である。彼はここで神が星を配置し、運命の秤を定めたことによって、“rota prima”，即ち *A Fair Infant* における “that high first-moving Sphere” は確実に回転し、その運動は内包する諸圈へ完全に作用しており、地球も原初の若さを失ってはいないと結論している。発言自体は George Hakewill の万物永久運動説への共鳴に外ならないが<sup>(5)</sup>、ジャコビヤン・メランコリを代表する John Donne の *Anniversaries* に見られる宇宙秩序への不安<sup>(6)</sup> と対置される秩序への完全な信頼を表明し、神の摂理がくまなく地上に行なわれる確信を示している。ラテン詩における摂理的宇宙秩序がこの詩の空間の基本的概念であることは二つの詩が同じ年に書かれたこと、また翌年に作られた *On the Morning of Christ's Nativity* 有名な宇宙ハーモニ (IX-XIV) があるところから見て疑いえない。こうして詩の中で地上と大気中層 (I-III) からオリンパス山上 (IV) を経て始動圈の彼方即ち天上 (VI) に至る空間秩序への完全な信頼が神の摂理として置かれているのである。このことによって詩は winter が支配する月下の世界及び古典神話の世界を不死、不滅の本源界から究極的に評価しうる構造性を獲得する。Universal decay の思潮の中で春や夏に対して世界の終末期の象徴であり、decay の体现でもある冬がこの詩において、地上を支配するという意味はダン的な意味での末世的、最後的な地上、救いようのない死滅の世界ということであろうか。美と正義が去って、忌むべきままに放置されるものであろうか？<sup>(7)</sup>

第7、8連に展開されるストーリは第6連において設定された空間を飛行する靈によってこれに答えるのである。今それを辿ってみると、(1)オリンパス山

上の Saturn と Jupiter との闘いを背景にしたと思われる、ミルトンの独創になる星の落下とジュピタによる天への回復のストーリーで、中心イメージは “some Star” (ll. 43-46)。(2)巨人軍のオリンパス山襲撃の際、女神が地上へ避難するストーリーで、イメージは “some goddess” (ll. 47-49)。(3)上のストーリーを受けるが、これは Psalm 85 : 10 を下図にした中世以来のキリスト教的アレゴリであって、 “just Maid”, “Mercy”, “Truth” 及び “any other of that heav’ly brood” が現われる (ll. 50-56)。(4)ここに至ってイメージは明確なキリスト教の天使 (“the golden-winged host”) となっている (ll. 57-63)。

(1)と(2)のオリンパス場面からヴィジョンが徐々に天上へと高められるにつれて、キリスト教的意味が明らかにされてくるが、星から天使のイメージを貫くものは紛れもなく古典神話からキリスト教に同化されていった Astraea である。アストリヤは黄金時代の昔人間とともに地上にいたが、やがて人間の邪悪に愛想をつかし、地上から遠ざかり、巨人達のオリンパス襲撃を機に永久に地上を去って星 (Virgo) となったと伝えられる正義の女神である<sup>(8)</sup>。この詩における “Star” から “goddess” へ、更に “that just Maid” を経て “the golden-winged host” の一人へと高まる連想はアストリヤ像がキリスト教に同化されていった過程に照応するものともいえよう。アストリヤの一般的意義は堕落した人間の罪意識を照らす象徴的基準として働くことであり、 *contemptus mundi* の思潮の中で生き続けて来たものである。ダンもまたこの一般的意義を利用して地上の絶望を *Anniversaries* で歌ったのである<sup>(9)</sup>。ミルトンの場合はどうであろうか。

まず気がつくのは地上を見捨てて天に戻る一般的なアストリヤの方向が、この詩では逆に天から地上への飛来という方向になっていることである。これをまとめると、

- (1) some Star ... didst fall.....(43-44)
- (2) some goddess fled / Amongst us here below.....(48-49)
- (3) that just Maid ... cam'st again to visit us. ....(50-52)

- (4) any other of that heav'nly brood / Let down in cloudy  
throne. .....(55-56)
- (5) thou of the golden-winged host ... / To earth from thy  
prefixed seat didst post. .....(57-59)

僅か3連の中で5回に及ぶ天から地への飛来の発言が示すものは、ミルトンが理解したアストリヤは地上を放擲して、天上に自分だけ逃避するという地上絶望を教えるものではなく、終末的地上への救済として、地上配慮の方向で考えられていることである。これはオヴィド的地上遭難のアストリヤ像に対して、“Messianic Eclogue”と呼ばれる Virgil の第4牧歌の伝統を継ぐものと考えられる。ミルトンにおける地上配慮の象徴としてのアストリヤ像はこの詩のかなめともいえるものであり、winter の凌辱と腐爛死体を歌った lamentation を全く新しい状況において回復する原理となる。なぜなら赤児の具かない生涯の実体がアストリヤ・天使の飛来であるなら、またそれが Justice, Mercy<sup>(10)</sup>, Truth などのキリスト教的徳目の顕現であるなら、またその目的が “to do the world some good” (l. 56) であるなら、winter の凌辱と腐爛死体は地上仮象に過ぎず、lamentation を担うイメージは消えてしまうからである。こうして母の悲しみを倍加するかに見えた第2の lamentation は新しい consolation へと導かれる。（図参照）

アストリヤ像のもう一つの重要な意義は、始めは地上に偶然落ちた星という全くの受身から、自ら地上に姿を隠すという能動に移って行き、ついで天上から降下されたという受身が再び現われることである。これは偶然的受動から自ら能動へ、更に摂理的受動へと、地上祝福の生体が認識的に深められてゆくことを示すものである。この摂理的受動をふまえることによって、アストリヤ・天使という複合像は第9連になってはっきり天使像として独立し、摂理的な意志を体现するミルトン的な意味における真に自由な行為者として現わることができる。天使が行なう地上への飛来も天への帰還も自由意志に基くと同時に、神の意志に完全に従っているのである。それ故 “To earth from thy prefixed seat didst post, / And after short abode fly back with speed.” (ll. 59-60)

の記述にある天使の完全に自由な行動の背後に地上の生と死について神の摂理的意志が働いていることの明白な認識があるのであって、このことは続く行で天使の行動が人間救済の恩寵的手段であり、赤児・天使の生と死を通じて人間はこのことを啓示されるのだと歌われることからも明らかである。

As if to show what creatures Heav'n doth breed,  
Thereby to set the hearts of men on fire  
To scorn the sordid world, and unto Heav'n aspire? (ll. 61-63)

この3行の美しさは当時の universal decay から出て来る地上離脱、天上憧憬を基調にしたペシミズムではなく、汚れた地上にこそ恩寵が降るという地上福音的なオプチミズムを生地としている。赤児の生が福音的に把握されたことは、逆にそのように尊い、得難い存在が何故早く去ってしまったかという歎きを発せさせる。事実これを起点にして10連で新しい lamentation が歌われるが(図参照)、これは第1、第2のそれとは全く異質なものであり、人間救済の悲願をテーマにしている。

But oh! why didst thou not stay here below  
To bless us with thy heav'n-lov'd innocence,  
To slake his wrath whom sin hath made our foe  
To turn Swift-rushing black perdition hence,  
Or drive away the slaughtering pestilence,  
To stand 'twixt us and our deserved smart? (ll. 64-69)

この lamentation の特質はアストリヤ・天使場面を経て、恩寵主体 (Christian God) を明確に認識した後に発せられたものであり、地上死の不毛性が完全に消えた意識レベルにおいて、恩寵手段である赤児・天使に直接訴えていることである。人間の罪が惹起し、そのために地上において死闘しなければならない神の怒り、その具体的な表現である凄まじい勢いで迫る万物の滅び (“Swift-rushing black perdition”) と当時のロンドンを襲うペストから地上の人間が救われんことの祈りがこの lamentation を構成しているのであって、個人の悲しみから人類的、社会的な苦悩を貫ぬく配慮にまで進んでいるのであり、こ

ここにミルトン的な意義があるといえるであろう。

## Ⅱ

ダンが Elizabeth Drury の死を機縁にして歌うのは死によって明らかになった世界終末の「解剖的」証拠の数々であり、その徹底した *contemptus mundi* の表明によって、地上の絶望が決定的なものになっている<sup>(11)</sup>。これに対して赤児の死を機縁にミルトンが歌うのは罪に汚れ、悪疫に喘ぐ地上への天の配慮である。ダンが地上絶望の方向を深めてゆくのに対して、ミルトンは *contemptus mundi* の中で、攝理的意志の地上配慮を念じ、汚れているが故に救われうる希望を表明しようとする。ミルトンの方向を地上志向と呼び、ダン一派<sup>(12)</sup>の地上絶望をもう少し検討してみよう。一派の中で比較的地上事物に題材をとった Henry King の “The Exequy” をとってみよう。妻の死の悼みを自らの死への期待において超克しようとするこの詩は地上の絶望を自明のものとする意識において、ダンの切迫した危機感から脱け出ており、ヴィジョンの中で自分と天上との距離が近いものとなっている。その結果死者と天上で再会できるという期待がもっとも重要なテーマであり、地上において死の競争でおくれをとった自分が恥ずかしく悲しく、一刻も早く勝利した死者の許に行きつく日を算え待つという部分がもっとも美しい。

Tis true, with shame and grief I yield,  
Thou like the *Vann* first took'st the field  
And gotten fast the victory

.....  
But hear ! My pulse like a soft Drum  
Beats my approach, tells *Thee* I come ;  
And slow however my marches be,  
I shall at last sit down by *Thee*.

(ll. 105-114)

こここの美しさは自らに残された地上での生を天へのひたすらな旅路を見る純粹に個人的なリリシズムの切なさにあるのであり、ダンに見られる地上の堕落を

直視する誠実な苦惱の感情は薄れている。死者に寄せるダンの悲しみはミクロ宇宙とマクロ宇宙との相関において常に普遍性を目指している<sup>(13)</sup>。それはミルトンの悲しみが上述の如く人類的、社会的な配慮に進むのと同じ強烈な個性であって、キングにおける個人的な悲しみが個人的な救済へと直結し、自らの死の期待において切実となる死への憧れとは異なるのである。この方向を更に進めた Henry Vaughan の “To the pious memorie of C. W. Esquire” をとって見よう。この詩では作者とおぼしき “I” が天上の戸口まで巡礼しているのであって、キング的な再会の期待以上に天が近くなっているのである。再会の挨拶を交すヴィジョンが *consolation* の最後を飾っている。

The next glad news (most glad unto the Just!)  
 Will be the Trumpet's summons from the dust.  
 Then Ile not grieve; nay more, I'le not allow  
 My Soul should think thee absent from me now.  
 Some bid their Dead *good night!* but I will say  
*Good morrow to dear Charles!* for it is day.    (ll. 87-92)

ここに見られる如くヴォーンでは、キングには未だ残る地上性即ち天までの旅とされた人生の苦難を耐えようとする決意 “Till age, or grief, or sickness must / Marry my body to that dust / It so much loves.” (ll. 85-87) も見られず、易々として天上が出現し、死者との再会が可能になる。死者への挨拶が「お休み」ではなく、「お早よう」となるロジックはミルトン、ダン及びキングを含めて、地上から天を仰ぐ姿勢即ち天と地の間の空間的距離感覚ではなく、天を光彩のヴィジョンによって現出させる発想によっている<sup>(14)</sup>。キングからヴォーンに至る死への志向の特徴はダンにおける地上絶望を地上で耐える立場 “For with due temper men doe then forgoe, / Or covet things, when they their true worth know.” (*An Anatomie of the World*, ll. 89-90) を素早く通り抜け、地上からの離脱それ自体に祝福があると考え、地から天への一方通行の死を礼讃する態度である。*Contemptus mundi* の思潮の中でダンが地上の絶望を誠実に見据え、告発してゆく姿勢をとり、それが深刻なペシミズムの

響きを伝えるのに反して、キング、特にヴォーンはこの地上性を切ることによって、ヴィジョンとしての楽園を光彩感覚に訴えて容易に作り出す一種のオプチミズムを響かせる。

ミルトンにおいても地上そのものの理解が色濃い *contemptus mundi* であることはこの詩の winter 支配の地上場面, “the sordid world” の表現及び第10連の lamentation における地上の現実認識がよく示している。しかし彼はこの地上絶望を摂理的な宇宙秩序に組入れることによって、生と死が天使の地上再訪と天上飛来を意味し、その目的が何よりも地上の救済であることを明らかにする。地上的には生及び死として現われる現象が天使の恩寵行為であり、この天地相互の往来の可能性をアストリヤによって示したことは、彼が死を天と地の両方通行において理解していたことを示すものであり、この思想の背後には *Naturam Non Pati Senium* で見た摂理宇宙の永久回転運動の確信があったと考えられる。それ故彼の関心は死者及び作者だけの世界で死が問題になるのではなく、人類的、社会的救済が前面に來るのであって、この積極的な地上志向性は第10連終行で完璧な表現を与えられている。

But thou canst best perform that office where thou art. (l. 70)

天上において地上救済の仕事をもっとも立派に果しうるという彼の考え方の背後には天から地への完全な恩寵関係についての認識があるのであって、ダンが *An Anatomie* で “heaven gives little, and the earth takes lesse” (l. 397) と歌った地上摂理への不安や絶望とは異なるオプチミズムに立っているといえよう。ミルトンにおけるオプチミズムはダンと同じ絶望的な地上認識から生まれてくるものであるが、後者が新科学による宇宙秩序の新解釈や既成社会体制の混乱という現実を世界滅亡の証拠として絶望を深めるのに対し、前者は winter の支配する現実を摂理的な秩序に組込むことによって、地上レベルの絶望を恩寵的見地から救済しうる認識に立つのである。ここにジャコビヤン・メランコリの体現者であるダンとジャコビヤン期の終った所から出発したミル

トンとの違いがあると考えられる。またダンから出発したキングやヴォーンがダンの地上性を切って、死への希求を表明し（キング）、内在的な楽園の想起によって（ヴォーン）地上の絶望を芸術的に処理してゆこうとする方向に對して、ミルトンは地上の絶望的な状態を現実に救済する恩寵の所在を追求するのである。上にあげて各々の occasional poems を通じて見た場合ダンのペシミズムからヴォーンのオプチミズムへと流れる17世紀前半の瞑想詩的な現実逃避の方向に對して、ミルトンは地上絶望をふまえた上で、死を天の摂理的意志の回転的な一相として把えることによって、その働きを何よりも地上救済という現実的な課題としている。ここに *Areopagitica* から *The Tenure of Kings and Magistrates*, 更に *Paradise Lost* 第11及び第12巻へと發展した彼の地上改革と配慮の素地が覗えるのであり、この萌芽的なピューリタン的実践性は彼がダン一派とは違った召命的な詩人として歩き始めたことを示すものであるといえよう<sup>(15)</sup>。

今この地上志向性を彼の初期の哀悼歌の中で探るならば、まず3年後の *An Epitaph on the Marchioness of Winchester* ではつぎのようである。

After this thy travail sore  
Sweet rest seize thee evermore,  
That to give the world increase,  
Short'ned hast thy own life's lease.                          (ll. 49-52)

更に7年後 *Lycidas* では consolation の最後を飾る部分に、海で死んだリシダスが海を行く人の守護霊となるくだりに現われてくる。

Now *Lycidas*, the Shepherds weep no more ;  
Henceforth thou art the Genius of the shore,  
In thy large recompense, and shalt be good  
To all that wander in that perilous flood.                          (ll. 182-185)

これらに示されているのは地上的には一回きりの死という不毛な事件が天の摂理意志によって何よりも地上に生きる人間の救済 “to give the world increase” あるいは人間への配慮 “thou art the Genius of the shore” として

天から地への恩寵関係において認識されているということである。この地上志向の恩寵觀は死の課題を離れても、初期ミルトンの基本的姿勢であったことは *Comus* のプロログが終る所で The Attendant Spirit が明らかにする自分の地上降下の目的が地上への恩寵であること、

Yet some there be that by due steps aspire  
To lay their just hands on that Golden Key  
That opes the Palace of Eternity:  
To such my errand is, and but for such,  
I would not soil these pure Ambrosial weeds  
With the rank vapors of this Sin-worn mold.

(ll. 12-17)

更に絶唱と呼ばれる最終2行 “Or if Virtue feeble were, / Heav'n itself would stoop to her” は宮西博士の言葉を借りるなら「それは恩寵が、いついかなる場合でも、必要に応じて発動される態勢になっているという意味」<sup>(16)</sup> であって、地上への摂理意志が厳然として存在し、劇の展開が示す如く、純潔と誘惑との地上的な戦いの場で前者の勝利を実現する決定的な筋として働いているのである。

## III

表に見る如く lamentation が波動的に consolation へと恩寵のモチーフを高めてゆくにつれ、最後の consolation はその本来の機能を発揮できるようになる。最終連において詩人は悲しみの母に直接歌いかけ、赤児の死を如何に受け入れるかを示す。

Then thou the mother of so sweet a child  
Her false imagin'd loss cease to lament.

(ll. 71-72)

赤児が天使であることが明らかになった以上、失ったと思うのは幻に過ぎない。咳の苦しみに耐えかねて死んでいった3歳児の生涯が摂理の一完結点であることが判った今は、歎き悲しむことは神に対して不敬であろう。

And wisely learn to curb thy sorrows wild ;  
 Think what a present thou to God hast sent,  
 And render him with patience what he lent. (ll. 73-75)

ここに見られる生は天からの借物であり、死とは神へのお返しであるという考えは、ミルトンにあってはセント・ポール在学時代 D. Erasmus, Angell Day 及び Thomas Wilson のテキストで習熟した死者哀悼のストイック・コンヴェンションの前提となる考え方である<sup>(17)</sup>。しかしこの前提から導びかれる “wisely learn” や “with patience” という人間的努力によって死の悲しみを絶つ→見斯特イックな表現はこの詩にあっては母に歌いかけられるという構造の中で読むならば、極めてキリスト教的な意味を持っていることが理解される。このくだりが母に歌いかけられる場合、母はわれわれがこれまで見てきた詩の展開即ち自分の子が低く下げられたかに見えたとき、実は高く上がっていた恩寵の過程を経験しているのである。そして重要なことは低く下げられた場面、即ち winter-primrose の事件がおきた地上に母は生きているのである。キングやヴァーンに見られた自らの死の期待において consolation が遂げられるのではなく、死が地上において本心からの喜びとなることにミルトンの救済観の本質があることは述べてきた通りである。彼の恩寵観からすれば借物を神に返すというストイックな論理だけでは赤児の死を “false imagin'd loss” として受け入れるわけにはゆかない。低く下げられた凌辱のイメージが詩の冒頭にあったのは、不毛性そのことがすでに恩寵に重なるという理解が詩の展開の中で実現されるための戦略である。あのむごい場面が神の恩寵であるという認識になるためにはアストリヤ・天使場面が理解の過程にならなければならず、この過程で明らかになるのはキリストの十字架上の死が理解の原理として、詩の各々場面のイメージの背後を支えていたことが明らかになってくる。赤児の死は primrose からアストリヤ及び天使のイメージを通過することによって、キリスト受難の詩的再現として把握されるのであり、人間のレベルで悲しみを断とうとするストイックな理解では有効ではない。聖なるものが非道の力の前に全く無力と映る

のは、かかる恐怖と絶望をくぐらなければ現実に囚われた人間の心は彼岸の意志を把みえないが故の神の摂理であろう。地上でもっとも無力な者のもっとも惨めな死にかたが、実はそのことゆえにもっとも聖なる勝利であることをこの詩はわれわれに示すのである。しかし残念なことにミルトンはかかる恩寵観を一貫したテーマとして追求しながら、上に見た3行でストイックなコンヴェンションに頼ってしまったことである。詩及び彼の詩的直観とは裏腹にこの3行は人間的努力によって悲しみを超えるように求めている。ここに19歳のミルトンの恩寵観の不十分さが見えるのである。2年後に計画された *The Passion* が中断され、年令に比べて主觀が高すぎたと自白しなければならなかつた遠因の一つはあとに述べるようにキリスト受難を原型として理解されるべき死の地上救済としての摂理が十分把握をみるに至らず、この3行の表現の甘さとなっているといえよう<sup>(18)</sup>。

J. I. Cope は悲しみが “false imagin'd loss” であるのは赤児の死即ち winter による “rape” が “rapture” に外ならないというパラドックスから説明できるとした<sup>(19)</sup>。語源的にも面白いし、彼が引用する数々の註解もそれ 자체としては首肯しうるものが多い。しかし凌辱を陶酔に直結させる解釈はこの詩を当時のキリスト教的な恋愛詩として予め受けとっているように思われる<sup>(20)</sup>。彼がもっとも多くの頁を割いて証拠としてあげる Ganymede 神話に関して、ミルトンはコープがしたように Ganymede→Enoch; Elijah→Christ のようなキリストを下図として理解すべき形象として使ってはいないのであって、常に享楽的な愛の場面に登場させており<sup>(21)</sup>、この詩とほぼ同時代の *Elegia Septima* ではガニミーディはオヴィィド的愛の讃歌の中に出て來るのであって<sup>(22)</sup>、コープが証明しようとするキリスト教的な昇天と歓喜を担う形象として考えられていなかったことを示すものである。Winter による凌辱を契機として明らかになる赤児の本体はこれまでに明らかになった如く詩自体が表現しているアストリヤ・天使という古典及びキリスト教の複合イメージと詩自体が明らかにするキリスト受難のパラドックスから完全に説明しきれるものであって、しゃく

取りとして Zeus によって天にあげられ、ギリシャ的少年愛を強く意識させるガニミーディの「昇天」と「陶酔」をこの詩の説明主体として赤児・ガニミーディ・キリストの複合像を作る必要はないと考えられる。

“Her false imagin’d loss” が提起したストイシズムの問題及びこの句のバラドキシカルな意味からコープの論を検討したが、この句の更なる解明と積極的な意義は最終2行において詩自体によって与えられるのである。

This if thou do, he will an offspring give  
That till the world’s last end shall make the name to live.

(ll. 76-77)

我が子の死とは天使が天に帰還することであり、それ自体神の地上祝福の一完結点であることが明らかになった今は、“This if thou do” は直接には不十分な3行を含む71-75行であるけれども、響くりズムは感謝と希望の祈りである。この祈りを通じて完結点と見えた死が起点となって、神が再び母を通じて地上に天使を遣わすのである。神の配慮は常に地上に向けられ、人間救済に集中していることを詩はすでに明らかにしてきたのであり、かつミルトンの摂理的な宇宙観念によれば正義は永久に地上に働くからである。

この確信に立ってミルトンは悲しみの姉に歌いかけたのである。彼女の祈りが天に達するとき、彼女を通じて天から舞下りるつぎの天使は以前にもまして地上救済の仕事を続けることであろう。彼女は再び赤児に恵まれ、しかもこの赤児・天使の故に彼女の名は世界の終るその日まで人々の感謝と希望の中に生き続けることであろう、と。

最後の consolation が winter の支配する地上において死の不毛性が母の懷妊に、一回性が回帰性に、喪失が歓喜となって現われてくると歌うことによって、ミルトンは死に働く摂理が生の面にも積極的に働くこと、また恩寵はヴァーン的な死後の期待であるよりも一層切実に地において実現されることを示したのである。かかる詩的認識に達することによって、彼はわれわれに死という不毛な仮象が実はより大なる生の契機であることを明らかにしたのである。

## 註

- (1) W. R. Parker, "Milton's 'Fair Infant,'" *TLS*, Dec. 17, 1938, p. 802. J. M. French は1月22日としている。See *The Life Records of John Milton* (Rutgers Univ. Press, 1949), I, 152.
- (2) 版によって句読点が異なる。H. Darbshire, B. A. Wright はコロン, M. Y. Hughes はセミコロン, F. A. Patterson は run-on 等。ストーリの重みを全部受けつつ、異質の調べに変るのであるからコロンが適当と思われる。
- (3) D. C. Allen が二つの質問としたのに対して Hugh N. Maclean が三つと訂正したのは正しい。See "Milton's 'Fair Infant,'" *ELH*, XXIV (1957), 302, n. 5.
- (4) See J. I. Cope, *The Metaphoric Structure of "Paradise Lost"* (Johns Hopkins Press, 1962), p. 50.
- (5) See R. F. Jones, *Ancients and Moderns* (California Paper ed., 1965), p. 36; Herschel Baker, *The Wars of Truth* (Harvard U. P., 1952), p. 84; J. A. Bryant, "Milton's Views on Universal and Civil Decay," *SAMLA Studies in Milton*, ed. by J. Max Patrick (University of Florida Press, 1953), p. 4.
- (6) John Donne, *An Anatomie of the World*, ll. 186-196, 251 ff.
- (7) ダンは宇宙秩序への不信を表明した事によって、地上の絶望を決定的なものにしている。
- "For heaven gives little, and the earth takes lesse,  
And man least knowes their trade and purposes.  
If this commerce twixt heaven and earth were not  
Embarr'd, and this traffique quite forget,  
She, for whose losse we have lamented thus,  
Would worke more fully, and pow'rfully on us." (ll. 397-402)
- (8) H. J. Rose, *A Handbook of Greek Mythology* (Methuen, 1965), p. 175; Ovid, *Metamorphoses*, I, 149, 151-162. なおミルトンの *A Fair Infant* における Astraea イメジについては、J. I. Cope の "Fortunate Fall as Form in Milton's 'Fair Infant,'" *JEGP*, LXIII (1964), 660-674 に負うところが多い。
- (9) M. H. Nicolson, *The Breaking of the Circle* (Columbia U. P., 1960), pp. 92-95; G. Williamson, "The Design of Donne's Anniversaries", *Milton & Others* (Faber & Faber, 1965), p. 158.
- (10) 原版 (1673) 欠如であったのを Heskins (1750) が Mercy と推定した。これまでの版はこれに従ったが、最近 D. C. Allen が Virtue とし (*op. cit.*, p. 51), H. Maclean は Peace とした (*op. cit.*, 302, n. 6.)。J. I. Cope は上掲論文において Mercy を主張。この詩は神の地上配慮という恩寵テーマを中心にしてゐる。

- 以上 Mercy が正しいと考えられる。
- (11) *An Anatomie of the World*, l. 184, 238, 326, et passim. See G. Williamson, “Mutability, Decay, and Jacobean Melancholy,” *Seventeenth Century Contexts* (Faber & Faber, 1960), pp. 33–34; H. Baker, *The Wars of Truth* (Harvard Univ. Press, 1952), pp. 75–76; M. H. Nicolson, *op. cit.*, pp. 81–88.
- (12) ここにダン一派と呼ぶのは G. Williamson, *The Donne Tradition* (Noonday Press, 1961), pp. 123–133, 142–150; A. Alvarez, *The School of Donne* (Chatto & Windus, 1961), pp. 59–60, 83–90 に従った。
- (13) “Then as mankind, so is the worlds whole frame  
Quite out of joyn, almost created lame.” *An Anatomie* (ll. 191–192).
- (14) Louis L. Martz はヴォーンの創作原理を “Memory” とし, 内なる楽園を形象化する発想を “Augustinian” と呼んでダンと区別した。 *The Paradise Within* (Yale U. P., 1964), pp. 23–24.
- (15) Universal Decay の反流としてミルトンが共鳴した G. Hakewill の方向は結果的には The Royal Society 及び18世紀の進歩の観念につながるものである。ミルトンとこの流れとの関係は新しい課題であってここでは扱えない。See F. R. Jones, *op. cit.*, pp. 31–38; H. Barker, *op. cit.*, pp. 76–86; R. S. Crane, “Anglican Apologetics and the Idea of Progress”, *MP*, XXXI (1933–34), 374–9.
- (16) 宮西光雄『ミルトン研究』(あぽろん社, 1961), p. 295.
- (17) D. L. Clark, *John Milton at St. Paul's School* (Archon Books, 1964), pp. 191–192, 227–228; Benjamin Boyce, “The Stoic Consolation and Shakespeare,” *PMLA*, LXIV (1949), 771–774.
- (18) ストイシズムの超克は *Paradise Regained*において究極的に完了すると思われる。尚この第11連については失敗だとする意見が多い。D. C. Allen, *op. cit.*, p. 52; Maclean, *op. cit.*, 28.
- (19) Cope, “Fortunate Fall as Form in Milton's ‘Fair Infant’”, *op. cit.*, 671–674.
- (20) かかる読み方をしたのは J. W. Saunders, “Milton, Diomedes and Amaryllis,” *ELH*, XXII (1955), 274.
- (21) See *Elegia Septima*, l. 21; *Paradise Regained*, II, 353; “Outline for Tragedies,” *Columbia Works*, XIII, 234.
- (22) “Talis in aeterno iuvenis Sigieus Olympo  
Miscet amatori pocula plena lovi.” (ll. 21–22). e

## The Poem's Strategy for Emotional Amplitude

